

速報：弓道場建設にともなう本発掘調査，開始

中央ローンの残雪もすっかり消え、北大キャンパスも緑萌える季節となりました。平成16年5月に「通水式」が行われて約50年ぶりに再生されたサクシュコトニ川にも、雪解けの清流が戻ってきました。サクシュコトニ川に沿って小径を下り、中央道路を越えたところで大野池にいたりますが、その少し手前、ヤチダモやハルニレが生い茂った林間に弓道場があります。小川のせせらぎや小鳥たちの声と響き合う弓道部員のかけ声、自然豊かな広大なキャンパスを擁する北大ならではの風情です。

伝統あるその弓道場も老朽化がすすみ、この度新たな建物が建設されることになりました。これまでに本誌で紹介してきましたように、この場所でも工事に先だって埋蔵文化財（遺物・遺構）の有無を確認する試掘調査が行われ、現在より千数百年前の擦文土器が発見されました。この結果を受けて、北大埋蔵文化財調査室では本年5月8日から発掘調査を開始しました。発掘調査が開始されるまでの間に、工事の際にはその場所に埋まっている埋蔵文化財をできるだけ傷付けることなく、なおかつ使い勝手のよい洗練された弓道場を建設するために、関連する部局の教員や職員、調査室員らがアイデアを持ち寄って、建物の基本設計はもちろんのこと、工事で掘削される場所や深度などについ

での種々の検討が慎重に重ねられました。

現在、発掘調査は順調に進み、建設予定地の南東側、予定した全域の約1/4が終了したところです。再生されたサクシュコトニ川よりも大きく西側に振れた昔の河道が、厚く土砂に埋もれて発見されました。発掘調査では地面に四角い穴（発掘区）を掘り、その壁面にタテ切りにした地層を露出させます。そこには旧河道を埋める砂層と粘土層とが交互に堆積する自然の美しい造形が見られますが、まさにその中に千数百年を隔てた太古の擦文土器の破片が埋もれているのです。調査はまだ序盤ですが、これまでの成果から旧河道の傍らで活動した擦文文化を遺した人たちの様子が髣髴としてきます。以前に発掘調査した北大校内のサクシュコトニ川遺跡（K39遺跡恵迪寮地点）では、川床に打ち込まれた数十本からなる杭列が発見されています。これは築や鰯と呼ばれる定置漁具の一種だと考えられています。立地条件から推察して、この場所（K39遺跡弓道場地点）でも何か類似した設備（遺構）が埋もれている可能性も考えられます。

発掘調査は8月中旬まで続きます。遺跡の全容が現れてきた段階で現地での説明会の開催を予定しています。ひととき、北大の地下に眠る太古のロマンに思いを馳せてください。



写真1 旧河道を埋める地層（西側から）



写真2 K39遺跡弓道場地点の土器発見状態

（埋蔵文化財調査室）